

國學院大學學術情報リポジトリ

2023年度国際研究フォーラム「見られることで何が 変わるのか--ツーリズムと宗教文化」報告書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-05-21 キーワード (Ja): NDC8:161.3, NDC8:689 キーワード (En): 作成者: 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001633

「ギリシャ」：神話とキリスト教の舞台そして観光 —文化遺産を活かす共存—

石本 東生

(國學院大學観光まちづくり学部 教授)

1. はじめに

今回のテーマである「見られることで何が変わるのか—ツーリズムと宗教文化」の「見られること」と「ツーリズム (=観光)」という2つのタームは、観光社会学の世界において大変重要な関連性を包含している。というのも、1970年代以降、米国のディーン・マキアーネル、英国のジョン・アーリ、そしてイスラエルのエリック・コーエンなど、世界的に著名な観光社会学者の間では、「観光者から見られる」ことによる地域社会の変容が大きな議論となったからである。具体的には、観光者から「見られる」ことで、地域の町並みや文化、そして生業などの「真正性(オーセンティシティ)」がどのように変容するのか、というのがその論点である⁽¹⁾。

ところで、筆者は南欧のギリシャに2度留学し、都合10年間首都アテネに滞在した。帰国後も東京に置かれたギリシャ観光省ギリシャ政府観光局に12年勤務し、その後、大学教員に転身した。以降、現在に至るまで、毎年2回のペースでギリシャの現地調査に赴いており、筆者にとって、ギリシャは最も重要な調査研究フィールドである。また、ギリシャは欧州においても屈指の観光大国であることから、今回は、

- ◆ オリンポスの神々の神話そして初期キリスト教発展の舞台でもある「ギリシャ」において、その文化遺産を活かし共存しつつ観光発展に繋げる手法
- ◆ ギリシャ国内観光地における「見られること」による地域文化の真正性の変容の2点に着目して報告をおこなう。

また、これらを論じる具体的な事例としては、

- ◆ 世界遺産「アテネのアクロポリス」の大理石彫刻・遺物
 - ◆ エーゲ海・サントリーニ島におけるキリスト教教会堂の活用
- の2つを取り上げたいと思う。

2. ギリシャの概要

まず、ギリシャという国の概要、基本的なデータを、ごく簡単に述べておきたい。ギリシャはヨーロッパの南東部、バルカン半島の南端に位置している。イオニア海を挟んで西にイタリアがあり、エーゲ海を挟んで東にトルコがある。国の人口は1,046万人（2023年調べ）であり、東京都の人口よりも26%程度少なく、EU加盟国内でも小国の部類に入る。国土面積は約13万2千km²であり、日本の国土の3分の1ほどである。

歴史的には周知の通り、ヨーロッパでも最古と言われる古代エーゲ海文明の発祥の地であり、古典ギリシャ時代、ローマ帝国時代、ビザンティン帝国時代、そしてオスマン帝国時代を経て、19世紀初頭に、あらためて近代ギリシャの独立を果たした。

経済的には、2010～18年の間は、所謂ギリシャ経済危機により、国家経済破綻の窮地にも陥ったが、その後再生して2022年の段階ではGDPが2,175億USドル、日本円に換算すると約32.6兆円という規模になっている。また国の基幹産業は、観光業、海運業、農林水産業が挙げられ、そのうち観光業は、国の実質GDPの1/4を占めるほどの主幹産業である⁽²⁾。外国人観光客の入込数としては、新型コロナの時期を除けば、近年は毎年約3,200万人がこの国を訪れており、小国でありながらも、国際観光の世界ランキングでは、10～12位という屈指の観光大国である。

3. 観光者の「まなざし」による地域文化の変容

3-1. 京都・産寧坂における地域文化の真正性

さて、観光発展による地域文化の真正性の変容について、ギリシャの事例の前に、端的に国内事例を示しておく。

図-1は、京都・清水寺の北東に隣接する「産寧坂」というエリアの一角である。そこは国の「重要伝統的建造物群保存地区」（以下、重伝建と呼称）に選定されており、江戸末期から大正初期に至る時代の建造物群が良好な状態で残されている地区であることから、個別の建物ではなく面的なエリアとして文化財保全の対象となっ



図-1) 京都・産寧坂重伝建地区

ている町並みである。この重伝建の特徴の一つには、建物の外観は維持すべきものの、内部の改変はほぼ自由と言って過言ではなく、用途も都市計画上の用途以外、特段の制限は受けない。よって、多様なテナントビジネスが展開されている。そして、観光統計データからも、この地区は、京都市内においても最も外国人観光客を魅了するエリアとなっている⁽³⁾。

この産寧坂通りでとりわけ賑わいを見せる中心部に、ある京雑貨の人気店が営業している。ところが、当該店舗においては、意外にも「日本製コーナー」という売り場が設けられており、多くの商品には「日本風」という3文字のポップが付されている。つまり、大半の商品が京都製もしくは日本製ではなく、中国を中心とした東アジア、東南アジアの国々がその生産国となっている。他にも、産寧坂や祇園周辺には、レンタル着物店が無数に存在するが、それらの店舗の商品もそのほとんどが、中国および東南アジア諸国の生産品である⁽⁴⁾。

勿論、中国製であることに問題ありと論じたいのではなく、産寧坂という京都観光の重要拠点において展開されている観光ビジネスが、京都の長き伝統文化に貢献しているのかどうかを問いたいのに他ならない。西陣織や京友禅など、貴重な京都の伝統文化の保存・発展には何ら寄与することなく、むしろ悪影響さえ与えかねない「地域文化の真正性の変容」が顕著である。

3-2. 観光社会学の世界における「真正性」議論の整理

観光社会学の世界における、このような真正性の議論は、1970年代頃から活発となった。米国カリフォルニア大学パークレー校の教授であったディーン・マキアーネルによれば、観光の実態は近代人が近代社会の真正性 (Authenticity) を探し求める儀式であり、近代社会を映し出す観光の真正性は、提供者が時に観光客を欺くことで演出される、という。これをマキアーネルは「演出された真正性」(Staged Authenticity) と呼んでいる⁽⁵⁾。

一方、英国ランカスター大学教授のジョン・アーリは「観光のまなざし (The Tourist Gaze)」という理論を提起した。本フォーラムでは「見られること」がテーマであるが、アーリは具体的には、観光者の眼差しというのは、実に移ろいやすいもので、新世代の観光者は観光で真正性を探し求めるようなことは、まず一切することなく、心底遊びを楽しむというのが現代の観光者である、と指摘している⁽⁶⁾。

他方、イスラエルのヘブライ大学教授であるエリック・コーエンは、観光が地域文化の崩壊と、地域そのものの破壊を招く過程を詳細に分析した上で、場合によっては、観光は地域文化の保全や再構成、更に地域の持続可能性をもたらし得る。加えて、地域文化は観光により保全されるだけでなく、再構築・再創出も可能であると論じ、これをコーエンは「創発的真正性」と呼称している⁽⁷⁾。

4. ギリシャの事例紹介

4-1. アテネのアクロポリス

① アクロポリス大理石遺物の国外への流出

さて、これ以降、ギリシャにおける具体事例を論じる。

アテネのアクロポリスは、ギリシャの首都アテネのほぼ中心部に位置し、標高156mの石灰岩の上部に城壁を築き、頂上部を平坦化した上で、紀元前447年以降、パルテノン神殿やエレクティオン神殿、ニケ神殿などの神殿群、およびプロピレアなどの建造物が築かれた。その丘は言うまでもなく、古代ギリシャ文明の象徴でもあり、今もギリシャ観光の目玉ともなっている。1987年にユネスコの世界文化遺産にも登録された。

さて、そのアテネのアクロポリス上で最大且つ優れた建築技術によりつくられたのが、図-2内写真のパルテノン神殿である。本報告において特に強調したいのが、このパルテノン神殿の貴重な大理石彫刻やレリーフが不法に略奪され、国外に流出し、今に至るまで返還されていない事実である。

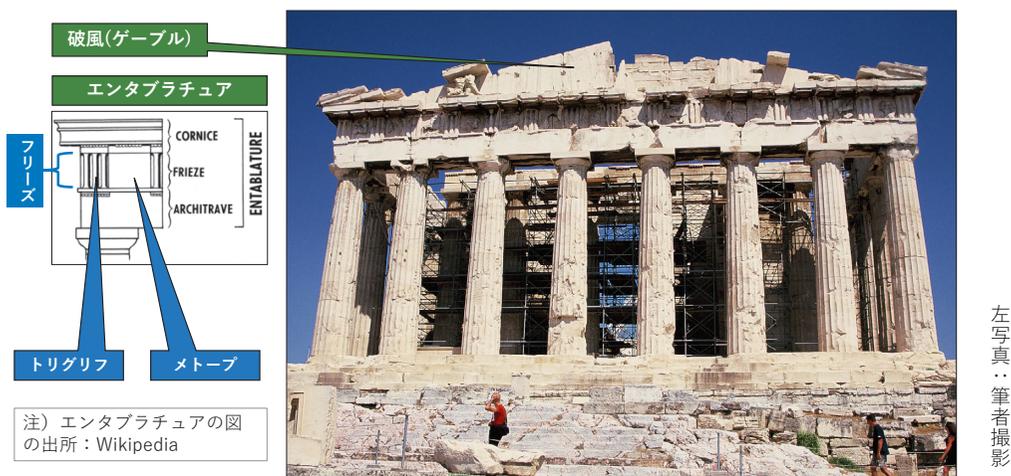


図-2) パルテノン神殿西側近景

パルテノン神殿は、幅が30.6m、奥行きが68.7m、外周には正面と裏面にドーリス式円柱がそれぞれ8本、側面にはそれぞれ17本が配置されており、列柱の内側には回廊と内室とを隔てる内壁が築かれている(図-3)⁽⁸⁾。また、東側正面と西側裏面では、切妻型屋根とエンタブラチュアと呼ばれる水平構造部の間に挟まれた三角形部分の「破風(はふ)」には、元々、古代ギリシャにおける著名な彫刻家フェイディア

スが製作したといわれる豪華な彫刻群が設置されていた。さらに、エンタブラチュアの中央部にはフリーズと呼ばれる部分があり、そこは三筋彫のトリグリフとメトープによって構成されていた(図-2・4)。

一般的なギリシャ神殿であればメトープは平面のまま何も施されることが多いが、しかしパルテノン神殿の場合は、正面、裏面、両側面と全周囲のメトープにギリシャ神話の様々なシーンがレリーフで描かれており、且つ彩色まで施されていた(図-4)⁽⁹⁾。

一方、神殿の内室には、やはり先のフェイディアスが製作したと伝えられる高さ約12mで黄金に輝くアテネ女神像が祀られていた。このように、パルテノン神殿は、規模においても、建築技術においても、意匠においても当時のギリシャ世界の最高傑作であった。

ところが、現在のパルテノン神殿の破風やメトープには、それらの貴重な彫刻物やレリーフは、ほぼ見られない。既に周知の事実ではあるが、現在それらの大理石彫刻物は英国ロンドンの大英博物館アクロポリス室に収蔵されている。

その原因と経緯はどのようなものなのか。ギリシャは1453年より1832年まで、東隣のトルコ、当時のオスマントルコに支配されていた。その間、列強の国々からは特命全権大使がイスタンブールに派遣されていた。1800年には駐トルコ英国大使エルギンという伯爵が着任しており、このエルギン伯爵は着任直後から、アテネのアクロポリスの調査を開始していたという。そしてその数年後、任期を終えてイギリスに帰

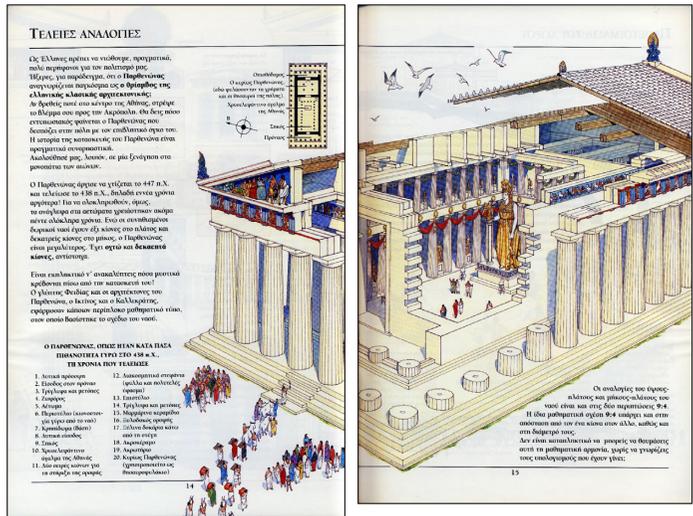


図-3) パルテノン神殿の外観と内部：ドーリス式の柱が46本の周柱式神殿

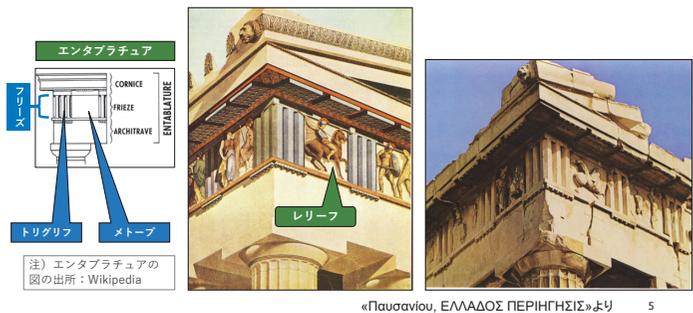


図-4) パルテノン神殿の「エンタブラチュア」とフリーズ部

体がまぎれもなく描かれている。他にも、同展示室の壁には、パルテノンのメトープ・レリーフ等がところ狭しとはめ込まれている。これらエルギン卿の蛮行に対しては、19世紀初頭、オスマントルコからのギリシャ独立戦争においてもギリシャの義勇兵として戦ったイングランドの詩人バイロンは、激しく批判していたとも伝えられている⁽¹¹⁾。

19世紀初頭
イングランドの
詩人バイロン



図一 7) 欧州大国による考古学遺品略奪行為（英国エルギン卿等によるもの）

② アクロポリス博物館の建設と竣工

他方、ギリシャ国民は、これら父祖の重要遺物が他国に流出している事実に対して、過去にも現在にも不断の返還運動を継続している。その返還運動において特に功績を残したのは、1981～89年にかけて文化大臣を務めたメリナ・メルクーリであった。メリナは1960年ギリシャー米国の共同制作による映画「日曜はダメよ」(Never on Sunday)に主演した女優であり、その後政界入りして、文化相として活躍した。彼女は、英国のみならず他国に不当に持ち出された古代ギリシャ文化遺産返還のため、とりわけ力を尽くしたことで、国民から絶大な支持を得ていた⁽¹²⁾。しかしながら、英国および大英博物館は「ギリシャにはアクロポリスの大理石遺物を安全に収蔵できる博物館が存在しない」ことを理由に、同博物館での所蔵を自ら主張し、肯定してきた。

そのロジックを覆すために、メリナ・メルクーリ自身も切望し、そしてギリシャ国民も願っていた博物館が、遂に2009年6月、アテネのアクロポリス南麓に竣工、オープンした。「新アクロポリス博物館」(以下、アクロポリス博物館と呼称)である。「新」というのであれば、旧館があったのかとの疑問が湧くのは当然であるが、実は、旧アクロポリス博物館は、長年アクロポリスの丘上に設置・運用されてはいたが、何より手狭であった。しかし、新たに竣工した博物館は、旧館の10倍ともなる展示スペースを有している(図一8)。

一方、地下の基礎部分の発掘時には、新石器時代の終り(紀元前3000年頃)から紀元後6世紀頃に至る様々な時代の住居群、道路、貯水槽が発見され、また各種壺、調理器具、香油ランプ等も出土した。また、まさにその場所を基礎として建設された新博物館では、エントランス前のテラスおよび館内グランドフロアの床に強化ガラス



博物館東側の外観 (Acropolis Museum提供)

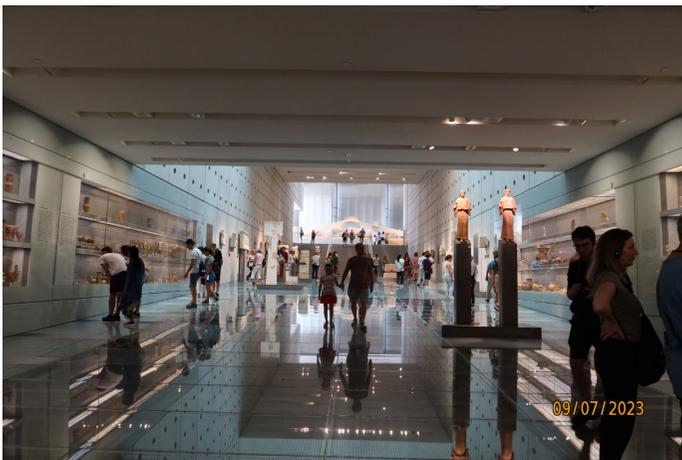


エントランス外観 (TO BHMA, Aug. 16, 2024)

図－8) アクロポリス博物館



図－9) アクロポリス博物館のエントランスと、基礎部で発掘された遺跡 (筆者撮影)



図－10) アクロポリス博物館の地上階展示場：床には強化ガラスが敷かれ、地下遺構も見下ろせる。緩やかなスロープで一階へと登っていく。(筆者撮影)

を敷き、地下の遺構が見下ろせる仕組みを取り入れている。実に、世界的にも稀有の博物館である。現在は、地下の遺構部分には見学路も整備されている(図－9)⁽¹³⁾。

③ アクロポリス博物館のコンセプト

アクロポリス博物館は、地階の遺跡部分を除き、建物自体はグランドフロア(=地上階、日本で言う1階)、1階、2階、3階という4階構造となっている。そして各階の展示フロアには明確なコンセプトが盛り込まれている。図－10はそのグランドフロアであるが、その床はゆるやかな登りのスロープとなっており、その奥が階段で1階(日本で言う2階)へと繋がっている。さらにスロープの左右には、これまでアクロポリス周辺の発掘調査において出土した遺物が整然と展示されている。すなわち、2400年前のアクロポリスのパルテノン神殿



パルテノン神殿のメトープ
(ドーリス式柱上の浮彫額)

左右写真：アクロポリス博物館提供

パルテノン神殿の内室と
外室を分けた内壁のレリーフ



図- 11) 展示ホール3階：パルテノン・ギャラリー

を目指して参道を登りつつ、その周囲で見られたはずの光景を再現するという、明確なコンセプトが込められている。そして最上階となる3階フロアは、パルテノン・ギャラリーと銘打たれ、アクロポリスの丘を登り切った眼前に、パルテノン神殿が現れるというストーリーのクライマックスを迎えるのである⁽¹⁴⁾。換言すれば、2400年前の参詣ストーリー、その歴史を、まさに「母国の同じ空間」で可視化し、「見られる歴史」に変換している努力は、長きにわたるギリシャ国民の悲願の結実とも読み取れる。言わば、可能な限り地域文化の真正性を担保するような博物館と位置付けられている。

④ パルテノン・ギャラリーが語り掛ける言（ことば）

そして、最上階のパルテノン・ギャラリーには、実物のパルテノン神殿と全く同じ方向を向き、同じ数の柱、同じサイズにつくられた「神殿」が再現されている（図- 11）。先述の通り、往時パルテノン神殿のエンタブラチュア（フリーズ）が神殿外周の柱の上部を囲っており、その内側には内室と外を隔てる内壁が設置されていた。その内壁の外周もレリーフで装飾されていたが、同様にパルテノン・ギャラリーの「神殿」の内壁外周にも、レリーフがはめ込まれている。しかしながら、それらのレリーフを眺めると、ベージュ色と白色の2色のレリーフが混在していることに気が付く。この区別の理由は、ベージュ色がオリジナル・レリーフで、白色がレプリカであることを来館者にはほめかすための施策である。実は、英国人エルギン卿は、パルテノンのすべてのレリーフを母国に持ち帰ったのではなく、幸い半数以上は残されたままであった。ギリシャ政府および文化省としては、自国の貴重な文化遺産が不当な略奪によって分断されている事実を世界中から訪れる観光客に訴え、パルテノン大理石の返還のため、さらに多くの人々から支援を得たいというのも、その理由の一つである。「見られること」による真正性の回復を目途としている。

図らずも、2009年6月、同博物館オープニングの記念式典では、当時、ユネスコ事務総長であった松浦晃一郎が来賓の上スピーチを行い、「全てのアクロポリス彫刻群が世界各地の博物館から返還されるように、ユネスコも最大限の努力を払う」と強く明言したことは、実に画期的な出来事となった⁽¹⁵⁾。

また、アクロポリス博物館のオープン以降も、ギリシャ政府、文化省をあげて英国側への返還請求を強めている中、近年、英国国内でも大英博物館の姿勢が根本的に問われ始めている。そして、2022年8月1日のThe Guardianの電子版は、大英博物館の副館長ジョナサン・ウィリアムズ氏が「パルテノン神殿の彫刻についてギリシャとの「パートナーシップ」を提案し、その条件の下でパルテノン神殿の彫刻が200年以上の時を経てアテネに返還される可能性がある」と述べた記事を掲載している。

先述した京都・産寧坂においては、「見られること」によって、地域文化の真正性に変質する危険性が生じていたが、アテネの本事例においては、逆に「見られること」によって、古代ギリシャの貴重な文化遺産の蘇生を実現しようとしている。これは、エリック・コーエンが論じる「創発的真正性」の具体事例と言って、過言ではないだろう。

⑤ メトロ・ステーションに見るアテネの観光まちづくり

一方で、アクロポリス博物館以外で、観光都市アテネの街中では、どのような観光まちづくりの施策がおこなわれているのだろうか。その特徴的な施策の一つが、アテネのメトロ・ステーションの

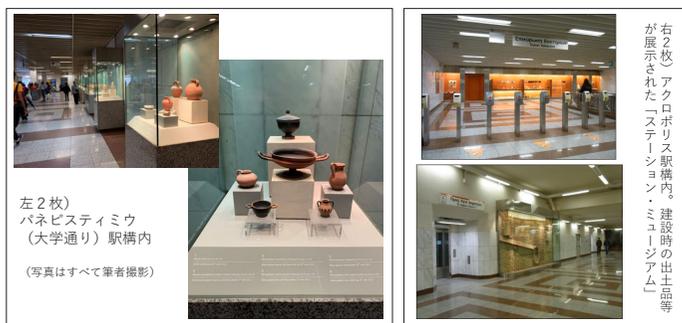


図-12) アテネ市内メトロ・アクロポリス駅など

コンコースに見られる。現在、アテネ市内にはメトロ（地下鉄）が1号線、2号線、3号線と3路線整備されている。1号線は1869年に完成し、ロンドンに次いで世界でも2番目に古い地下鉄とも言われている。2号線と3号線は2000年に完成したが、その工事の際は市内のあちこちで遺跡が発見され、考古学局の調査が入った。そのため、その度に工事の中断が余儀なくされたが、その結果、特に駅建設地周辺で発見された遺跡やその出土品については、駅構内コンコースに展示スペースを創設し、可能な限りそこに展示するという施策が取り入れられた。特に、国会議事堂前のシンタグマ駅の工事現場からは、初期キリスト教時代の巨大な墳墓群が発見され、その出土品等の多くは、現在、アテネの国立考古学博物館やビザンティン・キリスト教博物館に収蔵されているが、遺構と出土品の一部は、同駅コンコースの広々とした空間を利用

して展示されている。誰でも無料で見学が可能となっており、他にも市内中心部のアクロポリス駅、大学通り駅、モナスティラキ駅など複数の駅コンコースで、同様な展示を行っている。ヨーロッパには、ローマをはじめ多くの歴史都市が存在するが、このようなエグジビションをおこなっているところは、他に例を見ない（図－12）。

このように、観光客のみならず市民にも「見られること」を通して、日常的に古代ギリシャ文明の真正性に触れること、地域文化への深い理解を醸成することも期待できる、アテネ市の取り組みである。

4－2. サントリーニ島におけるキリスト教会の発展

① サントリーニ島の歴史概要

次にとりあげる2つ目の事例は、エーゲ海キクラデス諸島南部に位置するサントリーニ島である。伊豆大島よりひと回り小さい程度のこの島は、紀元前3000年頃エーゲ海で最古のキクラデス文明が発祥した地としても知られるが、紀元前1500年頃、島中央部の火山が大爆発を起こしたため、中央部一帯



図－13) サントリーニ島北部イア地区街並み（筆者撮影）

が陥没し、大規模なカルデラ地形を形成した。その後、中世にはキクラデスの島々にもキリスト教が広く布教され、サントリーニ島内では良質な赤ワインの生産が盛んになったため、地中海諸国各地にキリスト教会の祭儀用赤ワインとして数多く輸出されていた。ちなみに、サントリーニの赤ワインは、その島名にちなんで「ヴィンサント」と呼ばれている。

また、古代から中世、そして近代に至るまで、地中海海上交通の要衝であった。20世紀のはじめには地中海でも帆船が蒸気船にその役目を譲り渡したが、それまでサントリーニは数千年もの間、地中海海上ルートにおける重要拠点として、その名を馳せてきた。よって、この島には多数の船主がそのベースを置き、船員の家族も多く居住していた。特に、低賃金の船員たちは、本土から建築資材を調達して住居を建てるとなれば、高額なコストとなるため、カルデラの壁面に横穴を掘って洞窟住居を築いた。

さらに、その開口部にはドーム型のエントランスを付け足し、その壁面を白い石灰塗料で塗装した。結果、そのような洞窟住居がカルデラに無数につくられることを通して、赤茶けたカルデラの壁面に白いドーム型の家々が建ち並ぶ唯一無二の景観を形成するようになった。

一方、蒸気船の普及により、商船がサントリーニに寄港する必要性も著しく減少したことから、次第に、サントリーニは地中海海上交通の拠点としての役割を喪失していった。加えて、1928年と1956年には同島を大地震が襲い、この地震を機に多くの住民が離島し、急速な過疎化が進んだことから、島の集落はほとんど廃墟と化した。しかし、1975年以降には、島北部のイア地区において、カルデラの壁面に連なる洞窟住居群の特異な景観が潜在的な価値と評され、ギリシャ観光省ギリシャ政府観光局による国を挙げた「伝統的集落再生・観光地化プロジェクト」が始動した。1980年までには60棟の洞窟住居が再生され、ゲストハウスなどの観光施設として蘇った。このプロジェクトを引き金に、その後民間事業者による洞窟住居やキャプテンハウス（往時の船主の大邸宅）の再生・観光施設への転用が加速し、2000年を迎える頃には、世界的にも屈指のアイランド・リゾート地として人気を博すまでに成長した（図-13）⁽¹⁶⁾。

② サントリーニ島のキリスト教会堂⁽¹⁷⁾

さて、キリスト教会の発展の見地から興味深い点が、教会堂の数とその「私有率」である。サントリーニ島の面積は76km²と小さな島であるが、ギリシャ正教の教会堂が352棟、カトリック教会堂が10棟存在する。この島のスケールでこの教会堂の数は、まず他に例を見ない。

それは信徒による多数の献堂に起因する。前述の通り、歴史的にこの島は地中海海上交通の拠点となってきたが、特に中世以降はこの島の船員たちが、航海中、嵐に遭って生命の危機を経験すること



図-14) 島中部フィラ地区の私有教会堂（ギリシャ正教）。
（筆者撮影）

も度々であった。そのような過酷な環境下で、キリスト教信徒の船員たちは、主に守

護を求めて祈り、且つ「救われた暁には、主に感謝してサントリーニに教会堂を献堂します」と祈念したのであった。そしてその嵐から救われた船員たちはサントリーニに帰島後、祈願した通りに、主への感謝を込めて「教会堂を建造」して、それを主に捧げたという（図－14）。

よって、サントリーニの教会堂のほとんどは私有で、主要観光地イア地区においても、バナギア・プラツァニとアギオス・ゲオルギオスの2つの教会堂のみがギリシャ正教会保有のもので、その他、大小無数の教会堂は私有である。つまり、この島の私有の教会堂は、当然のことながら「人に見られる」ものではなく、「神に見られる」ものであったのは言うまでもない。

ところが、前項でも述べた通り、近年のサントリーニ島内の急速な観光地化により、教会堂の所有者が自身のプロパティをホテルなどの観光施設に転用し、事業を始めるケースが多々見られるようになってきた。そのため、今や「教会堂を有するホテル」も決して珍しくはない。むしろ、再生された高付加価値の小規模宿泊施設は、十分な利益を生み、それを教会堂やホテル施設のメンテナンスにも充当できることから、以前に増して教会堂の美しさを維持可能となる。且つ、ホテル宿泊者も教会堂を見学できることは、代えがたい体験アクティビティにもなり得る。これは、「神に見られるための教会堂」が「人に見られるための教会堂」に転換したとも言えるのである。

③ 旧修道院が高級ホテルに⁽¹⁸⁾

最後に、島内最大の観光地フィラの旧市街に位置する旧ドミニコ会修道院の建物について紹介したい。この修道院は、近年、修道士の数の減少から、その建物を養老院に転用していた。しかしその経営も困難となり、結果、廃屋同然の状況となっていた。しかし、カティキエスという国内のホ



図－15) 修道院をリノベーションした高級ホテル（筆者撮影）

テルグループが、ドミニコ会からこの施設を借り受けて、美しくリノベーションを施し、五つ星の豪華ホテルに再生の上、2019年にオープンさせた。客室は40室と、小規模ホテルがひしめくサントリーニでは、比較的大型のホテルである（図－15）。

当時の修道院内の象徴的な施設も一部残されており、例えば、パティティーリと呼

ばれるブドウ酒づくりの施設もその一つである。プールにも見える槽内に大量のブドウを投げ、足で踏んで果汁をうみ出し、それを発酵させてワインに仕上げていた原始的なワイン作りの施設が、現在も同ホテルの中で見て触れることができるように再生されている。ホテルによると、観光シーズンには定期的にワイン造りのイベントを開催しているとのことである。有形の歴史的文化遺産が「神に見られるもの」から、「人に見られるもの」に再生され、息を吹き返した事例である（図-16）。



教会堂、修道院など、有形の歴史的文化遺産が「神に見られるもの」⇒「人に見られるもの」に変化

図-16) 修道院ホテルの内部。修道院時代の景観が今も残る（筆者撮影）

5. まとめ

本報告においては、①オリンポスの神々の神話そして初期キリスト教発展の舞台でもある「ギリシャ」において、その文化遺産を活かし共存しつつ観光発展に繋げる手法、②ギリシャ国内観光地における「見られること」による地域文化の真正性の変容、とりわけエリック・コーエンが述べた「創発的真正性」に関して、歴史的観光都市アテネと、エーゲ海の珠玉とも呼ばれるサントリーニ島の事例をもとに考察してきた。

アテネの場合は、2400年前のパルテノン神殿への参詣ストーリーを今に再現しているアクロポリス博物館、その歴史とそこに込められたギリシャの悲願が可視化される、言わば「見られる歴史」に変化していったという事実、さらにそれが地域の文化遺産の真正性を再創出していることが伺い知れた。また、メトロ・ステーションの博物館も、歴史との共存、街をあげて地域の歴史文化を可視化している努力は、評価すべきであろう。そして、それらの努力が今や英国国内の世論にも少なからぬ影響を及ぼしていることは、特筆すべきことであろう。

一方、サントリーニ島の教会堂は、元来、人に見られるものではなく、神に見られるものとして建造されたものだが、文化遺産の再生と観光利活用という観点から、人に見られる、触れられるもの、そして観光者にとっても歴史体感が可能な施設へと転換している。例えば、ドミニコ会の修道院が高級宿泊施設に再生されている件については、様々な見方もあるかと承知するが、しかし、廃墟と化していたプロパティが、観光活用により蘇生し、そこで得られる観光収入がひいてはこのような歴史的建造物

を維持する事業にも充当されることは、文化財の持続可能性の点からも、実に重要な施策である。

あらためて、我々も、歴史文化遺産の持続的な維持運営のために、その適切な「活用」を考え直す時であると痛感する。

【謝辞】

2023年9月アテネにて、サントリーニ島のキリスト教会堂に関する聞き取り調査にご協力いただき、詳細な情報提供を賜ったギリシャ人建築家 Paraskevi Bozineki-Didoni 氏に、心より謝意を表したい。

また、2019年9月サントリーニ島フィラにて、ドミニコ会修道院の再生ホテル化について詳しいご説明をいただき、同ホテル内をご案内くださったオーナーファミリーの故 Evaggelia Mendrinou 氏に、心より感謝の意を表したい。

【注】

- (1) 安村克己, 堀野正人他編著 (2011) 『よくわかる観光社会学』, ミネルヴァ書房.
- (2) 外務省公式 HP, ギリシャ共和国基礎データ, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/greece/data.html>, 2024年8月16日閲覧.
- (3) 京都市産業観光局 (2023) 『令和5年 京都観光総合調査』, 京都市.
- (4) 石本東生 (2016) 「京都の観光力を支える「歴史的町並み保存」と観光振興の考察—重伝建地区「産寧坂」における観光ビジネスの展開—」, 『日本国際観光学会論文集』第23号, 日本国際観光学会.
- (5) ディーン・マキアーネル著, 安村克己, 須藤廣他訳 (2012) 『ザ・ツーリスト—高度近代社会の構造分析—』, 学文社.
- (6) ジョン・アーリ, ヨナス・ラースン著, 加太宏邦訳 (2014) 『観光のまなざし』, 叢書・ユニベルシタス, 法政大学出版局.
- (7) 上掲書, 安村克己, 堀野正人他編著 (2011) 『よくわかる観光社会学』.
- (8) 図-3の出所: MacDonald・Fiona, Bergin・Mark (1998) *Περιπλάνηση σε έναν Αρχαίο Ελληνικό Ναό*, Εκδόσεις Μοντέρνοι Καιροί, Greece.
- (9) 図-4内、右図と中央図の出所: Παυσάνιος (2004) *Παυσανίου Ελλάδος Περιηγήσεις Αττική*, Εκδοτική Αθηνών, Greece.
- (10) 図-5, 6, 7の出所: F・エティエンヌ, R・エティエンヌ著, 青柳正規監修, 松田廸子訳 (1995) 『古代ギリシア発掘史』, 「知の再発見」双書46, 創元社.
- (11) 上掲書, F・エティエンヌ, R・エティエンヌ著, 青柳正規監修, 松田廸子訳 (1995) 『古代ギリシア発掘史』.
- (12) Foundation Melina Mercouri 公式 HP, <https://melinamercourifoundation.com/en/>, 2024年8月16日閲覧.
- (13) The Acropolis Museum 公式 HP, <https://www.theacropolismuseum.gr/en>, 2024年8月16日閲覧.
- (14) 石本東生 (2011) 「ギリシャにおける文化遺産返還運動の成果と観光政策に関する一考察: 世界遺産・文化遺産保全と博物館整備の事例を中心に」, 『日本国際観光学会論文集』第18号,

日本国際観光学会.

- (15) 上掲書, 石本東生 (2011) 「ギリシャにおける文化遺産返還運動の成果と観光政策に関する一考察: 世界遺産・文化遺産保全と博物館整備の事例を中心に」.
- (16) 石本東生, 岡村祐, 江口久美 (2020) 「サントリーニ島イア地区における伝統的集落特別保護令による観光地形成—1993年大統領令の規定内容と運用実態の分析—」, 『都市計画論文集』第55巻第2号, 日本都市計画学会.
- (17) 本項の記述内容に関しては、2023年9月3日アテネにて、サントリーニ島の教会建築にも詳しいギリシャ人建築家 Paraskevi Bozineki-Didoni 氏に直接聞き取りをおこなった内容が中心となる。
- (18) 本項の記述内容に関しては、2019年9月上旬、サントリーニ島フィラのホテル Katikies Garden Santorini にて、オーナーファミリーの Evaggelia Mendrinou 氏 (故人) に聞き取りを行った内容が中心となる。